

資生堂ビューティケイク
「太陽に愛されよう」ポスター(1966年)
撮影：横須賀功光 モデル：前田美波里

SHISEIDO
BEAUTY CAKE
太陽に愛されよう

資生堂ビューティケイク

誘惑、挑み、長年一緒にいたのに、新しい一面を見つけた瞬間

誘惑、挑み、長年一緒にいたのに、新しい一面を見つけた瞬間

A: この描写についてどう思う？

K: このミステリアスな描写だよ。ある意味、物語に投げ込まれたような。誰かが秘密を持っているというアイデアを思いついた。誰かが何かを燃やして証拠を壊すというイメージ。静かなイメージだけど、燃えている本を持っていたりして、予期しないことが起こることを示唆しているような。

A: 笑。それはドラマチックだね。演劇みたい。

特別なロケーションを探してもよいね。

私も秘密が明かされるというような場面を想像する。浮気とか。もしくは暗い家族の秘密とか。私はオスカー・ワイルドの「ドリアン・グレイの肖像」が頭に浮かんだよ。美青年のドリアンの美しさと若さは変わらないけど、彼の肖像画は本来の容姿や精神を映し出すかのように醜く変貌していくって話。

K: うん。「秘密」というのが鍵だね。少し演劇的なアプローチで、誘惑をうまく演出できるかも。歴史的な設定でもよいし。

A: ロケーションはどこが良いかな？

K: アムステルダム国立美術館の図書館とか、古典的な権威を表す場所とか？

A: うーん、そんなにわかりやすくする必要もないかな。この資生堂のRemodelingのシリーズを全体的に考えたら、クローズアップのポートレート撮るのがよいかもね。

K: うん。このシリーズではその方がよいね。このエキシビションの参加アーティストは全員女性だし、女性モデルにする？

A: うん、よいね。おおがかりなセットではなく、人物とその人の表情や独自の動きにフォーカスする。でも、撮影しているときに試すためのスモークスプレー（煙のスプレー）も準備しておこう。

K: 賛成。スモークの効果と誘惑を組み合わせると、ミステリアスなイメージができたりするよね。準備した要素と、その場所で直感的に反応する要素を掛け合わせるのが、わたしたち得意な気がする。

A: 私は、自然で本物な感じがする写真が好きだな。こうやって準備しているから、文字通りの意味で本物ではないけど。

K: モデルは、表情の良い人を選びたいね。演技ができるひと。どんなイメージになるかな？

A: モデルは、「許されていない」ことに熱中していて、その姿を見られて驚くとか？

K: よいね。

A: 洋服と場所とのコントラストがあるとよいと思う。例えば森なのにドレスアップしているとか、ぼろぼろなバーなのにきらびやかなドレスでギャンブルをしているとか？モデルと周囲の間にズレがあるというアイデアがよいな。

K: ズレを見せるというのは挑みにもつながるね。シーンとしては森の中で何かを隠している人とか？その写真は瞬間も捉えないといけないからね。動きもいるね。

A: 暗い秘密をもっているとは思わないような、綺麗な人のその瞬間を撮る。

K: なんで綺麗な人である必要があるわけ？

A: そうでないとドリアン・グレイにならないよ。



資生堂ビューティケイク
「太陽に愛されよう」ポスター(1966年)
撮影：横須賀功光 モデル：前田美波里

SHISEIDO
BEAUTY CAKE
太陽に愛されよう

資生堂ビューティケイク

夏、暑さ、光り←太陽がまぶしい、波の音、抜けるような青空、
白い雲、砂つぶ、白い水着、焼けた肌

夏、暑さ、光り←太陽がまぶしい、波の音、抜けるような青空、 白い雲、砂つぶ、白い水着、焼けた肌

K: ビーチに連れて行ってくれるような言葉だね。典型的な風景じゃない？

A: オランダでは、ロケ地での写真撮影をする日が限られるよね。オランダは晴れの日が多い国ではないし、ところでは典型的な風景ってどういう意味？

K: 青い空、まばゆい太陽、白い水着から地中海の夏のイメージが最初に頭に浮かんだよ。実際、私はビーチにゆかりのある人間ではないけど。海の近くに住んだこともないし、海との強いつながりもないし。(頭に浮かんだ)最初の画像は、私が想像する「一般的な地中海のビーチ」だと思う。それは私の個人的な経験でなくてさ。

A: 旅行の宣伝やテレビコマーシャルでよく見かける画像ってことだね。モデルが完璧な白い砂浜のビーチでジャンプしたり、そこでカクテルを飲んだりしたり。

K: そうそう。私はインスタグラムとか他のSNSもあんまり見ないけど、プロが作り込んでいる写真なのに、それが普通にありえるイメージって思うことはあるよね。無意識に。そしてそれが標準的なイメージとして組み込まれているっていうか。私が馴染みのないくせに地中海を頭に浮かべたみたい。

A: うん。私も仕事でクライアントに(今後の撮影の)方向性を示すサンプル写真を見せるときにそう思う。打ち合わせするときがあるでしょ?いくつかの異なる方向性を示したいから、いろんなバージョンを作るのだけど。そういうときに、ストックフォト(頻繁に使用されるであろうシチュエーションで、予め用意された写真素材のこと。)の受けがよいのだよね。どう見ても現実を記録したら違う風になるよね?という写真で、モデルにもかなりフォトショップが入っている。結局、実際に納品する写真はドキュメンタリーの要素がつよいし、クライアントもそれでよいと思っているみたいだけど。でもなんで、ストックフォトの写真を現実的って思うのだろう。

K: 見慣れたものが脳裏で現実になるのだろうね。それが現実じゃなくてもさ。

A: 夏、暑さ、光り←太陽がまぶしい…に戻るけ

ど、白い雲はどうする。フォトショップで後から入れる？

K: わかんない…。(考え中)。フォトショップで入れ込むのはよい考えでない気がする。でも、写真撮影の日に白い雲がなかったら考えないとね。

A: そうだね。

K: 最初に頭に浮かんだ構図は、『ピンポン』(別作品)で撮ったニールズの写真のような感じかな。顔と上半身にピントが合い、背景がぼやけて。海のピンク/水色のグラデーションの背景の代わりに、青い空と太陽がある。

A: そうだね。日差しは強くて、モデルの肌には砂の混じった汗がにじむ感じだね。

K: モデルはだれがよいかな。

A: 描写には、モデルが誰であるかは書いてないね。モデルっぽい女性モデルは嫌だな。夏、青い空、白い水着と組み合わせたら、型にはまりすぎじゃない？

K: モデルっぽい女性モデルって？

A: モデルっぽいモデルは、すごく細くて長い脚と腕で、対称的な顔のモデルだよ。モデルの説明がないのは不思議じゃない？広告にはモデルがいるはず。

K: 本当。モデルについて書かれた言葉がないね。資生堂の夏の広告だから、日焼け止めの広告かもね。



まぶたの裏側

その日、海辺からもどると簡単な朝食をとり、すぐに画室に入った。下塗りしてあったキャンバスをイーゼルに立て、薄く溶いた茶色の絵の具を細筆につけた。額からはじめて、眼窩のくぼみ、尖った鼻先、口元、と進んで、顎先から耳に向かって一気に線を引き上げ、首のラインを描いた。そのラインに平行してもう一本引くと、顔の輪郭が定まった。

家から歩いて二十分ほどの浜には、朝起きてすぐに出かけた。いつものように肩にカメラを提げていた。潮の引きはじめた砂浜に立ち、ファインダーを眼に当ててカメラを前後左右に動かし、興味をそそるものを探した。よく見て、憶えて、描くことを自分に課している。見たものを憶えるには望遠レンズを使う。手をつかめたり、近づくとその距離をからだ感知できるような状況のもとで想像力を働かせるのは、自分にはむずかしい。ふだん物を見るとき距離と関係性を壊して、日常が断たれたところに浮かび上がるイメージを描きたいのだ。それには100ミリの望遠レンズが有効で、ファインダーに眼が接したとたん、距離が消えて別の視覚世界に引き込まれる。そのときにシャッターは切らないのかとよく訊かれるが、それはしない。写真に写せばカメラを通した眼の記録になってしまう。描きたいのはレンズを通して立ち上がり、自分の身を離れて醸されていく世界なのだ。

フレームのなかに、海に向かって立っている女性のバスタブの姿が映し出された。かき上げたロングヘアが背中に垂れ、顎は少し上げ気味で、まぶたは閉じている。その顔にレンズを据えたまま、額から順に、鼻、口元、顎、と輪郭をたどっていった。首は結構な長さがあり、肩から斜め前に飛び出すように付いていて、そのデフォルメされた彫刻のようなフォルムに惹かれた。

ランチを挟んで五時間ほど夢中で描くと、ガソリンが切れたように、はたと手が止まった。キャンバスには薄茶色と黄土色とベージュ色が塗り重ねられていた。最初に描いた輪郭線を繰り返し修正するうちに地と図がまじりあい、人が描かれているとすぐにはわからないほど、全体がひとつに溶け込んでいった。人物を説明するのではなく、実態を浮かび上がらせたかった。ではその実態とはなにかと問われても、かたちを超えたものとしか答えられない。かたちを超えたその人の在り方をとらえるなんて、言葉の意味としてはつながらないが、その矛盾こそが自分が絵において実践したいことなのだと思っていた。

夜は隣町の友人の家に夕食に招かれていた。日本から知り合いが泊まりにくるそうで、メニューはたぶんスシだろうとのことだった。スシには惹かれたが、億劫に思う気持ちもあった。彼

女のイメージから抜け出ると、今日の成果が眼から流れ落ちてしまいそうで、まだ浸っていたいという気持ちが強かった。それでも出かけることにしたのは、前回の誘いを急な用事で断っていたので、二度もそれをするのはためらわれた。

だが、今回も誘いをに断っていても結果に変わりにはなかった。車で向かう途中で事故を起こし、この身が友人宅に着くことはなかったのだから。あとで警察に説明されたところによれば、橋を渡って右に曲がる場所を、かなり手前でカーブを切り、橋の欄干に激突したらしい。意識がもどったときはまだそのことを知らず、顔の上のほうに見慣れない天井が浮かび上がるのを見て、自分はいったいどこにいるのだろうと思ったものである。

頭のとっぺんからつま先まで、さまざまな装置を使って全身がくまなく調べられたが、異常は発見されなかった。いったい何が起きたゆえにあのような事故に至ったのか、医者にも説明がつかなかった。打ったところが多少痛むくらいで、目立った故障がないことにも驚かれ、もう入院の必要はないと、四日目には解放された。

自宅にもどるとすぐに画室に入り、イーゼルの前に立った。描きかけの絵が視界に飛び込んできた。まちがいない。あの入道。意識が回復したときに、最初にやってきたナースだった。三角に開いたユニフォームの襟から突き出した長い首が眼に留まり、どこかで会ったことがあるように感じた。二度目に彼女がまわってきたときはそれが確信に変わり、本人に尋ねてみた。金曜日の早朝に××海岸にいませんか？ と。彼女は長い首をちょっと傾げてから、それはありません、と答えた。その日は夜勤明けで熟睡していて、起きたのは午後二時を過ぎていましたから。

彼女は思い違いをしているのだろうか。いや、そうではない。海岸に立っていたあの日の眼の表情を思い出せばわかる。あれは熟睡の最中にベッドを抜け出し、まぶたの裏に映っているものを見つめつづけている人の眼だった。その眼の旅に自分も連れて行かれ、いまようやくこうして、ここにもどってきたのだ。その考えが揺るぎないものになると、からだの底から力が湧いてきて、すぐさま上着を脱ぎ捨て、絵筆を握り、その手を慎重にキャンバスの上におろした。